

資料：子どものための冒険学校の小史年表

木俣 美樹男

Archives of Adventure School for children since 1988

Mikio KIMATA, FSIFEE, Tokyo Gakugei University

冒険学校を始めようと考えたのには二つの理由がありました。一つ目は、自分たちを常に現役探検家として鍛えることです。二つ目は、子どもたちを冒険に誘うように育てることです。東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部（以下、学大探検部）の独自性がここに見出せると考えたのです。私には、さらに三つ目の目的があり、自然や伝統文化の中で子どもの生態を学びたかったのです。当時、大学生相手の講義に慣れて、言い換えれば、自然や伝統文化についての学習体験の乏しい大学生あるいは大人に対する教育の可能性を疑い始め、子どもたちから始めないと環境学習の可能性は開けないのかと考えていたようです。

幸いなことに、当時の学大探検部には気の良い若者がたくさん集まっていました。しかし、多くの若い部員に熱意はあっても、活動資金はありませんでしたので、大学公開講座として企画をしました。担当係の方に相談に行きましたら、「どうして大学が子どもの講座を開くのか、前例がない」と相手にもされませんでした。例

のごとく、温厚な私もこれでは納得できないので、「学生たちと子どもたちがともに学ぶ講座こそが学大にあってしかるべきだ」と強く反論しました。

次第に声も大きくなり、近隣にお座りであった入学主幹（若い女性でしたがきっと今では文部科学省で高級官僚におなりでしょう）のお耳にも届いてしまいました。その結果、彼女の「やらせてあげなさい」との助言で、十分な資金援助を受けて企画は認められました。ただし、ご存知のように本来、働いた関係者が受け取るべき謝金など一切適切寄付していただいて、学生も教員OBも無償ボランティアとして、子どもの参加費を軽減、あるいは家計状況により奨学金としました。

何百人という子どもや大人たちが盛り立ててきた冒険学校は20年近くの歴史をもち、東京都五日市町（現あきる野市）、埼玉県大滝村（現秩父市）、山梨県小菅村とベースキャンプ地は移動してきましたが、今でも新しい学生や子どもたち、多くの大人ボランティア、農山村の人々

東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」の小史

回数	西暦年	題名	開催場所	主催
第1回	1988	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第2回	1989	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第3回	1990	子どものための冒険学校	五日市青少年旅行村	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第4回	1991	子どものための冒険学校	林野庁秩父大河俣造林宿舍	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第5回	1992	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第6回	1993	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第7回	1994	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第8回	1995	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第9回	1996	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第10回	1997	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第11回	1998	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第12回	1999	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第13回	2000	子どものための冒険学校	中津川キャンプ場	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第14回	2001	子どものための冒険学校	東京学芸大学農園	東京学芸大学、自然文化誌研究会
第15回	2002	ぬくい少年少女農学校	東京学芸大学農園	東京学芸大学、自然文化誌研究会

2003年以降は、冒険学校は自然文化誌研究会主催で山梨県小菅村で、ぬくい少年少女農学校はサークルちえのわ主催で東京学芸大学環境教育研究センターにおいて継承開催されている。

に支えられて続いています。

いろいろなことがありましたが、すべて皆様と共有できる楽しい思い出がどんどん貯まっていきます。どれだけ私や、きっと皆様の人生を豊かにしてきたか、あるいはこれからも豊かにし続けると思います。

一方で、意図せずですが、いくらかの影響を日本の環境学習活動や環境教育学の歴史に与えてきたと、参加者の皆さんとともに自負しましょう。常に、新たな方法論のパイオニアであり、一つの活動のスタンダードを作ってきたと思います。私たちはいつも現場にいて、人間や農山村のことを考えながら、現役で活動しています。

この冊子はなんと多くの楽しい思い出に満たされていることでしょう。冒険学校で育った皆さんと私たちは、これからもさらに次世代の子どもたちとともに生き、健やかに育っていきましょう。

木俣美樹男（2005.8.8 カンタベリーの丘にて）

*この小文は、「冒険学校のあゆみ」の序文として書いたが、今のところ公刊に至っていない。既に序文の意味を失ったので、ここに年表とともに掲載する。